

## 第6期事業報告書

(2009年4月1日から2010年3月31日まで)

特定非営利活動法人アーシャ＝アジアの農民と歩む会

本会がインド・U.P.州アラハバード県を中心に活動を始めて6年が過ぎ、本会のインドにおける国際協力事業は、農業のみならず教育、保健・栄養、農村組織、収入向上と貧困削減の分野でも、日本の財団、政府系国際協力団体等に認められるようになり、JICA等の大型支援が得られるようになった。これは現地スタッフ、現地派遣スタッフ、派遣短期専門家、国内事務局、および本会理事らの努力と協働による賜物であると考ええる。本会の活動にご支援、ご協力してくださっている全ての方々に心より感謝したい。

2009年度は特に「農村組織と農村人材育成」を強調し、様々な分野での活動を展開した。特に、農村組織活動では小規模自助グループ(SHG)と青年グループの育成、農村ヘルスボランティア(VHV)の育成、ミニコープ(稲作、養鶏)の育成に力をいれた。これらの活動をより実りあるものにするために、JICAの協力資金を得て、本年度、アラハバード県下の3ヵ村(マエダ村、ハルディー村、カンジャサ村)に希望農民学校を設立した。昨年度設立されたバルゴナ校を加えると、これで同校は4校となった。

また、インド日本大使館よりサムヒッキンボトム農工科学大学(前アラハバード農業大学)継続教育学部は「草の根無償資金」を得て、当学部3階に「持続可能な農村開発訓練センター」を今年3月に完成させた。この建設費の超過分と施設の内部設備費は主にインド三浦後援会等からの寄付金が充てられている。このような教育訓練施設の充実は、現地スタッフや受益者にとって大きな励みとなっており、今後のプロジェクト活動の躍進が期待されている。

継続的に行われている事業も含めた今期の活動報告は以下のとおりである。

### 1. アーシャ職員及び専門家派遣事業

#### (1) 現地スタッフ

2009年度は、アーシャより日本人現地スタッフとして町上貴也を派遣した。彼は現地派遣3年目。現地事務局主任兼会計主任として、総務事務、本会広報、多岐にわたる複雑な会計業務の効率化、明確化を進めた。また、膨らむ事務や会計業務をこなすために現地人スタッフを増やした。彼はその指導にもあたっている。継続教育学部に現在総務部関係者として6名のスタッフが配置されているが、彼の誠実に働く姿勢は皆から高く評価されている。

#### (2) ボランティアスタッフ

今年度もインドプロジェクトでボランティアを受け入れた。町上広子(旧姓:後藤)は昨年2月より、また、立花かおりは昨年8月1日から2月下旬まで、佐々木希は8月1日より11月までである。彼女たちには着任当初より語学能力に応じて、2~4カ月間のヒンディー語学研修をしてもらった。この語学研修はボランティア活動をしていただく上で非常に有効であることがわかった。

町上広子は食品加工と販売開発および食堂管理と学生への英語の授業、立花はコンピ

ューター授業と本会会報紙の編集・発行、また佐々木は子どもの環境教育の分野で責任をもって奉仕してくださり、当プロジェクトに多大な貢献をした。

### (3) 専門家派遣

今期においてアーシャより派遣された専門家は以下のとおりである。

- 三浦孝子（母子保健）2010年1月31日より3月31日まで。
- 奥村昌子（健康栄養）2010年2月6日より3月8日まで。
- 高丸和彦（大豆加工）2010年1月30日より2月28日まで。
- 石原 潔（食肉加工）2010年1月30日より2月28日まで。

具体的な専門家の活動については下記の事業協力活動に示すとおりである。

## 2. 事業協力活動

### (1) 「10ヶ月持続可能な農業研修コース（SCSA）」の支援：

サムヒッキンボトム農工科学大学継続教育学部における2009年度の今年度は、ミャンマーキリスト教協議会からの4名、ネパールから1名、インド4名、総勢9名（内女性3名）が2009年7月に継続教育学部に入学し、2010年4月3日に、全員が卒業した。卒業生は各々の地域に帰り、職場復帰をしている。また2名のインターン（ミャンマー国籍）も同日、卒業式に臨んだ。この事業のために、アーシャから派遣されているスタッフ、ボランティア、専門家全てが教師として、リソースパーソンとして関わり支援、協力をした。

### (2) 女性と農村青年のための自助グループ（SHG）組織づくりに対する支援：

特に、アラハバード県内のマエダ村、バルゴナ村、カンジャサ村、ハルディー村、チャッカハザリ村を中心にこの活動は行われている。農村組織は小規模自助グループ、農村組織をプロジェクト対象村に40団体まで増やした。グループメンバーのほとんどは農村女性である。彼女たちは識字教室、貯蓄、小規模ローンの貸付、収入向上活動を主な活動と定め、更に、会の活動を通して、協働の必要性、子どもの教育の重要性、女性の社会差別の認識、アルコール依存症の弊害、貧困削減等、社会に対して改善しなくてはならない事等も学んでいる。この事業の経済的支援は主にJICAからである。

### (3) 健康栄養・農村母子保健の事業を支援：

2年前より力を入れているこの事業を推進するために、短期専門家として、三浦孝子（母子保健・母乳育児専門）、奥村昌子（健康栄養）を派遣した。両氏の協力による農村保健改善事業は大きな成果を上げている。彼女たちの専門的な知識と技術提供の効果があって、ボトムアップ方式で女性ヘルスボランティア（VHV）育成が着実に行われている。VHVの具体的役割は母乳育児推進、乳児の体重測定による生育不良の早期発見、乳児の補完食の指導、若い母親の育児相談等である。VHVが主催する村の集会、セミナー等に村の女性たちが積極的に参加するようになってきた。彼女たちの活動が郡政府レベルの保健機関に認識されるようになり、協力関係が強まってきたことは積極的に評価してよいと思われる。

農村ヘルスボランティア（VHV）およびVHVリーダーの訓練と育成が地道に行われ、アラハバード県の対象地域6ヵ村に12名のVHVを配備することができた。その中から2名がVHVリーダーとして3ヵ村の村に在住するVHVと共に活動を展開して

いる。更に、VHV の村での役割が明確化されてきたこと、政府保健機関との協力関係および補完関係の構築が進んでいることは本事業の自立性、効率性からみても、大きな前進といえよう。

この事業実施のために味の素より過去 2 年間助成金をいただいていたが、2010 年 1 月より JICA の支援金を受けられるようになった。

(4) 貧困家庭の農村教育支援活動：

年度当初、アーシャ学校は 9 村、9 校で、全児童が 700 名で、数量的にはほぼ横ばいであるが、教師の研修、児童環境・農業教育が定着してきた感がある。ジャリ校は教師の質が高まり、児童数が増え、運営上独立することができた。また、カンジャサ校、インダルプール校等の力のある学校も同様に運営上独立させたいと考えている。一方でより僻地な農村にアーシャ学校を新たに設立する考えである。アーシャ学校の独立後も、要望と必要性があれば、教師の訓練や環境農業教育、学校制服の補助、奨学金等の支援を継続する計画である。

(5) 貧困農民のための収入向上活動のための支援：

食品加工品、マーケティング開発、裁縫、ニーム製品等の販売に力をいれ、貧困住民の収入向上、且つ能力向上（エンパワーメント）に結びつくように配慮し、事業を実施した。有機農産物については有機日本米の販売が伸びているが、有機野菜の販売システムがまだ確立できていない。今後も有機農業組合をとおして、この分野の更なる努力が必要である。この販売システム開発を推進するために当学部では 1 トン以上のトラックを購入する。

収入向上と関連の事業は以下の通りである。

- 有機農業組合の加工部門で働く女性が 5 年前より味噌、醤油、酢、ソーセージ、スモークチキン等を製造し、販売しているが、前年度に比べそれらが大幅に増加した。これはデリーへの宅配販売が増えたこと、インド在住日本人の間で需要の多いアラハバード産日本米がその宅配販売の商品に加わったことがあげられる。この宅配販売は日本語でのメールのやり取りが必要であるが、2009 年 2 月よりボランティアとして現地滞在している町上広子に対応してくれた。感謝である。
- 一方、組合女性が作るソーセージ、スモークチキン、レモンジュース類は当学部玄関前に作られた組合ショップで大学生に対して売り上げを急激に伸ばしている。これは学生が購入可能なソーセージの価格を設定し、その低価格開発に向け現地職員、専門家の尽力によるところが多い。現在、7 名の現地の女性と 3 名の男性がその製造、販売に関わっている。質的な改善は必要ではあるが、すべての加工品を自力で製造できるようになった。将来的には、この事業を経済的に自立させたいと考えている。この事業には派遣専門家・高丸和彦氏、石原潔氏の功績が大きい。
- 農村女性のための事業として、農村女性のための裁縫教室研修事業の助言活動及び、裁縫技術を用いた収入向上事業の支援を行った。事業によって、アーシャ学校の制服を 60 着以上作った 6 名の農村女性に対し、足踏みミシンを贈与した。この内の何人かは入浴剤の布袋づくり、また村人のブラウス等を作ることによって収入を上げている。
- インドハーブ入浴剤を今年度は 2500 個製造した。布袋づくりからパッキングまで、

全ての工程をカンジャサ村の農村女性とバルゴナの青年クラブが中心になりできるようになった。製造をもっと増やすために、その販売開拓が必要とされている。この裁縫技術を活用し、買い物袋（エコバック）の制作を研究している。

- アラハバード県内に自生するニーム（インドセンダン）の実を集め、ニーム油の製造とニーム油粕の製造を行っている。これらの製品は有機農業の資材として使われ、アラハバードはもとより日本へ輸出販売されている。現在は収入向上部門のスタッフと青年クラブが中心となり事業を継続している。

(6) 持続可能な農業（特に養鶏、有機稲作）研修事業とその普及支援：

- アラハバード地区の農民 22 名に対し、養鶏、有機稲作、有機農業等の研修を継続教育学部および希望農民学校等で行った。収量的には失敗したが、有機稲作（日本米）はデリーの日本人を中心に高い評価を得ているので、小規模農民の収入向上、有機農業の推進のための戦略作物として今後も研究しながら増産していく計画である。
- 5 年前より始めた養鶏普及は徐々にではあるが広まる傾向にある。ヒンドゥー教の農村社会では、伝統的価値観の阻害要因もあり、ブロイラー養鶏の普及は非常に難しい。が、当初 4 名だった養鶏家は現在 16 名と増えている。貨幣経済が農村にも浸透するなかで、現金収入向上の必要性が大きくなってきているのである。今年度は養鶏セミナーに参加した 4 家族が養鶏を始めた。今後も、養鶏セミナー、養鶏組合組織づくり等の継続的活動が必要である。

(7) 第 5 回収穫感謝祭開催の支援：

2010 年 2 月 20～21 日、カンジャサ村で実施した。収穫感謝祭をプロジェクト対象村で行うのは今回が最初である。上記のプロジェクトに関わっている農村住民、青年団、SHG、アーシャ学校の児童など、約 600 名近くが祭りに参加した。味噌味ポラタの実演と販売、環境保全、母子保健や教育の重要性を訴えるための寸劇等様々な催しが行われた。その他、継続学部の活動紹介、子どもや青年等による歌・踊り等様々な催しが披露され、よい交流の場となった。同時に、村の住民に広く、上記の活動を知ってもらう良い機会となった。

(8) アーシャ主催のワークキャンプスタディーツアーは参加者がいなかったため、実行を中止した。今後、ツアー募集の対象者や内容について吟味する必要があると思われる。一方、酪農学園大学・横山ゼミのインドスタディーツアーは 11 月 25 日から 12 月 4 日まで継続教育学部を中心に行われた。参加者の中から大学卒業後、インドでボランティアしたいという学生が現われている。今年は佐々木希がそうであった。今後も大学生を対象にしたスタディーツアーワークキャンプを受け入れることは本会にとっても意義があると思われる。

(9) 活動報告会：

2009 年 5 月中旬から 7 月にかけて、アーシャ理事である三浦は、北海道、山形、東京、三重、熊本に於いて、プロジェクト支援者を中心に、集中的なインドプロジェクトの紹介を行った。また訪問地で、プロジェクトに関係する施設、工場（味噌・醤油、豆腐等）を視察した。

(10) 広報活動：

- アーシャの活動、サムヒッキンボトム農工科学大学継続教育学部のプロジェクトをより広く理解していただくために、昨年度は4回の会報を発行した。これらの発行は全てインドで印刷し、直接支援者に郵送した。
- 本会理事である佐藤耕士が2010年1月から2月にかけてインド現地に滞在し、本会のホームページの更新を行った。近年、本会のホームページを見て、訪問、ボランティア等をしてみたいという若者が増えている。更に、経済的支援をしてくださっているJICAや財団への本会の活動紹介とアピールをするためにも、重要なツールとなっている。今後もホームページを充実させることは必要であろう。
- また、奥田真嗣、奥田悠史等の長期訪問者が中心になってアーシャ紹介ビデオ（日本語版、英語版）が完成した。感謝である。今後このビデオを活用し、本会の活動に役立てたい。

(11) フィリピンスタディーツアー参加：

国際農林業協働協会（JAICAF）の支援で、三浦照男、町上貴也、それにアラハバード農業大学継続教育学部のスタッフ、A.K.ミシュラ、サントシュ・クマール、マンミートソハールの5名が、2009年12月4日から16日までフィリピン・ルソン島ビコール地方を中心に実施された。このツアーには継続教育学部と協力関係にある愛農会本部（三重県伊賀市）職員山本和夫、坪井涼子が合流した。

有機農業を実施している現地NGOの活動地を訪問し、意見交換、交流、視察見学等を行った。

(12) ミャンマー・カチン州の農業大学校への支援：

当学校教員として採用内定しているMs. Zawng Nyoïを食品加工、Mr.Gumlaの有機農業のインターン研修を支援した。彼らは4月3日に卒業し、Ms. Nyoïは当大学家政学部に進学する計画である。また、Mr. Gumlaは卒業後直ちに帰国し、職場復帰する予定とのことであった。

### 3. 事業の実施に関する事項

#### (1) 特定非営利活動に係る事業

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)
農村指導者研修所の運営を支援する事業	研修所職員の質の向上を図る研修費を支給する	随時	随所	3名	研修所の研修生約50名	70
未就学児のための初等教育施設の運営を支援する事業	① アラハバード県の僻地にあるアーシャ学校の低学年児童を対象にした環境教育を行う。(イオン環境財団)	随時	インド・アラハバード地区	5名	児童700人	1,000
	② 農村青年、農村女性の組織作りのための支援(今井記念海外協力基金)	随時	インド・アラハバード地区	5名	青年・女性100人	1,000
奨学金を支給する事業	アラハバード県の貧困家庭に対する奨学金	随時	インド・アラハバード地区	3名	20名	30
農村の地域開発と農業の改善及び普及を支援する事業	① 町上貴也を現地派遣する。(担当:会計、広報、マーケティング)	2009年4月より2010年3月まで	インド・アラハバード地区	1名	インド・UP州アラハバード地区3万人の農民	200
	② 三浦孝子・奥村昌子を母子保健・栄養専門家として短期派遣し、母子保健、母乳育児の農村ボランティアの育成支援。(味の素)	2010年2月から1ヶ月間	インド・アラハバード地区	4名	インド・UP州アラハバード地区3万人の農村住民	2,100
	③ フィリピン・スタディーツアー	2009年12月	フィリピンルソン島ビコール地区	7名	フィリピン農村開発NGO200人	1,400
	④ 食品加工、有機農業専門家をアラハバード農業大学継続教育学部に派遣し、健康栄養、有機農業普及の支援をする。(JAICAF支援)	2010年2月より一ヶ月間	インド・アラハバード地区	4名	インド・UP州アラハバード地区3万人の農村住民	3,500
	⑤ 農村青年、農村女性の組織作りのための支援(JICA支援)	2009年7月～2010年3月	インド・アラハバード地区	5名	青年・女性100人	8,000
	⑥ 農村栄養と母子保健改善事業(JICA支援)	2010年1月～3月	インド・アラハバード地区	5名	インド・UP州アラハバード地区3万人の農村住民	5,500
	⑦ ミャンマーの持続可能な農業に関する支援	随時	ミャンマー・カチン州	2名	ミャンマーの開発NGO200人	40

事業を推進するための調査研究及び、啓発広報活動	①日本国内における学生及び市民のためのセミナー及び講演の企画、主催、及び参加	随時	日本各地	3名	500	60
	②会報の発行	年4回	日本、インド、米国	1名	日本国内、インド、米国 200人	130
	③ホームページ維持費(更新費・人件費含む)	随時	随所	2名	日本語が読める不特定多数	240
事業に係わる管理費	事業の円滑な運営のための管理費	随時	インド・アラハバード地区	2名		265
	事業の円滑な運営のための管理費(人件費含む)	随時	日本国内	1名		370
合計						23,900

(2) その他の事業

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	支出額(千円)
実施無し					